

# Put a spring to your step & a smile to your face!

静岡県立浜松西高等学校 同窓会  
2012年 新春の集い



元点  
回起

Return to Nishiko  
Beyond the rest



元気なココロを共有し  
さらなるパワーアップを!



ng to your step  
to your face!

元点  
回起

Return to Nishiko.  
Beyond the next.

元気なココロを共有し  
さらなるパワーアップを!





## 式次第

2012年1月2日(月)

会場：グランドホテル浜松  
鳳の間

14:00 受付開始

15:00 開会宣言

校歌斉唱

開会の辞

祝辞

表彰式

還暦者ご紹介 /

鏡開き (高22回卒)

乾杯

祝宴

ドキドキ

OBグループ紹介

ワクワク

じゃんけんゲーム

新春大抽選会

18:00 代表幹事挨拶

次年度幹事挨拶

同窓会旗授与

応援歌斉唱

閉会の辞

記念撮影

【司会】 河村 由美 (高44回卒)

※都合により内容・進行順が変更になる場合があります。

# Put a spr & a smile

『原点回帰』から『元点回起』へ。

『元』は「大きい、よい、正しい、おおもと、はじめ」などのほか「万物を成長させる大きな徳」という意味があります。また、『起』は「始める、おきる、立つ、盛んになる」という意味があり、先駆者や開拓者を連想させる文字です。

この2文字を用いた『元点回起』という言葉には『原点に帰って本来の自分を再認識し、さらなるパワーアップをして前進しよう』という願いを込めました。

・本日は、在学当時の思い出を語り合いながら、原点に帰り、楽しいひとときをお過ごしください。そして、多くの仲間たちと元気なココロを共有し、明日からの糧にさせていただければ幸いです。

# 校歌

作詞 内野徳治  
作曲 泉善三郎

一、 銀くもりなき大洋や  
とつてんかがよ おおなだ

東天耀ふ芙蓉峰  
ふようほう

天与普き西山に  
てんよ あまね

聳ゆる麓 厳しく  
そび いらかいかめ

こもる力の偉なるかな

二、 真澄める空に讃歌の  
ほごうた

声朗らかに打ち揚げて

清き尊き若き日の

誇りゆたけく睦みゆく  
たけつ

心の光遠きかな

# 応援歌

一、 くろがねの男の子の腕  
お かいな

揮うべき時は来たりぬ  
ふる

虹に似た我等が意気を

示すべき時は来たりぬ

ハイザー西高 ハイザー西高

フレー オー オー

二、 いでやいで打ちてつくして

戴かん勝利の冠  
かむり

いでやいで追い斥けて  
はらして

握らんか覇権の剣  
はけん

ハイザー西高 ハイザー西高

フレー オー オー







# Put a spring to your step & a smile to your face!

元気なココロを共有しさらなるパワーアップを!

## CONTENTS

- 01 式次第
- 03 校歌・応援歌
- 04 目次
- 05 ご挨拶
  - 静岡県立浜松西高等学校 同窓会会長 稲垣 訓宏
  - 静岡県立浜松西高等学校 後援会会長 伊藤 孝
  - 静岡県立浜松西高等学校 校長 植松 豊
  - 2012年新春の集い代表幹事(高44回卒) 大村 明広
- 09 元気な西風! 今日も何処かで。
- 11 増田 正雄(中2回卒)
- 14 ヒル美子(高37回卒)
- 15 山口 利恵(高50回卒)
- 16 畑 薫(高40回卒)
- 17 青葉 滋美(高12回卒)
- 18 清水 淳次(高34回卒)
- 19 左右田 丈夫(中19回卒) 左右田 泰文(高37回卒)
- 20 河村 由美(高44回卒)
- 21 高田 麟太郎(中等部3年)
- 23 この坂を登って
- 27 祝還暦 高22回卒「当時を振り返って」
- 30 東日本大震災チャリティー 銀ボタンストラップ
- 31 協賛企業索引
- 広告

## 高44回卒 STAFF

- 【代表】 大村明広
- 【副代表】 柴山和俊・荒木寿文・鈴木宣洋  
兼原伸夫・喜多晃義・小枝知世枝
- 【事務局】 余川浩之・中家美弥子・古川千栄
- 【オブザーバー】 鈴木宏昌・金原正典・鈴木周司  
星野晃由・鈴木建之・河村由美  
中村透樹
- 【企画部】 荒木寿文・梅村香織・安藤文貴
- 【広告部】 鈴木宣洋・坪井正和・吉見雄一  
山本晃子
- 【チケット部】 喜多晃義・服部浩幸
- 【記念誌部】 兼原伸夫・老川順子・佐藤智香  
池田八栄子・澁谷真一郎・石田賢之  
川上晃弘・川合弥寿彦
- 【会計部】 柴山和俊・山田孝幸
- 【クラス幹事】 小枝知世枝・池谷博文・村木伸光  
嶋海博将・水野洋道・堀野明宏  
村越功司・波多腰賢治・青野祐三  
山崎久雄・小木野貴光
- 【協力】  
荒井正博・鴨川健太郎・河合秀樹・小池信成・鈴木純嗣・土射津昌久  
横一暁・中安基幸・平野昌吾・平野博士・藤原了英・古橋雅孝  
牧田光司・水島義博・村井禎隆・山本恵三・赤井泰介・安藤喜章  
梅田幸生・太田功・佐々木直幸・鈴木啓市・中村哲実・中谷奨  
野島聡・森重樹・横間文彦・青木紀人・今田将博・太田健司  
小楠正樹・尾崎宏嘉・加茂公彦・木原倫夫・小杉尚孝・清水正弘  
須網政浩・杉山茂信・武田浩安・谷口英之・遠山克文・戸田晃裕  
中谷泰臣・中野浩・名倉秀明・野田尚也・尾藤洋志・松下文彦  
向井大輔・森英樹・谷中成光・渡邊明彦・石田高之・出水雄二  
伊藤共代・宇賀さおり・大野暢子・小栗幸房・木下雅佳子・楠野雅章  
手塚聡子・林ノ内克也・半澤章子・福田薫・福田治子・前嶋孝典  
伊熊千佳・奥村陽子・小原知也・柿澤宏実・木口智美・口田実穂  
柴田勲央・野末武・袴田大助・橋詰万里子・山田典子・山田真代  
石川裕子・小松弘典・笹ヶ瀬順也・鈴木希代美・都筑悟・中根千佳  
中山智香子・西野直樹・椋本早苗・村松敏弘・山野宏靖・石原由美  
内山薫・太田博文・大野真・大庭真弓・鈴木伸英・野沢俊郎  
吉田徳安・安藤毅・伊藤晃徳・岡本多重子・小粥信一・齋藤謙太郎  
齋藤嘉浩・鈴木恒安・鈴木美加・坪井美栄・古橋宏直・本多美穂  
足立聡美・安西恵理・石川慎太郎・大石裕之・加茂直樹・坂下忠  
鈴木めぐみ・竹内美帆・袴田英史・細田直孝・村上隆之・森本真美  
若松早弓・足立剛史・稲川順子・樋口英孝・鈴木孝彦  
(2011年11月10日現在 順不同)
- 【Title】 加藤大介(高44回卒)
- 【Design】 tekuiji DESIGN(担当:高44回卒 星野晃由)
- 【Writer】 川上晃弘(高44回卒)・川合弥寿彦(高44回卒)
- 【Photographer】 Shibuya Film Entertainment Japan  
(担当:高44回卒 澁谷真一郎)
- 【Special Thanks】 茂木美佐子(Writer)
- 【印刷】 (株)アプライズ(担当:高44回卒 鈴木建之)
- 【発行】 浜松西高等学校第44回同窓会幹事会

本記念誌の企画・取材・制作にあたっては、多数の同窓生、その他関係諸氏のご協力を賜りました。この場を借りてお礼申し上げます。

# CHAIRPERSON OF THE ALUMNI ASSOCIATION

# ご挨拶



静岡県立浜松西高等学校

同窓会会長 稲垣 訓宏

新年明けましておめでとうございます。

「新春の集い」が今年も盛大に開催できるところを心より感謝申し上げます。ご来賓の皆様、同窓生の皆様、ようこそおいでくださいました。

本年の「新春の集い」のテーマは、『元点回  
起』元気なココロを共有し、さらなるパワー  
アップを！です。「原点に帰って本来の自分を  
再認識し、さらなるパワーアップをして前進  
しよう」という意味を込めて、当番幹事である  
高44回卒のみなさんが考えに考えた末にたどり着いたイメージを表す造語とのことです。

東日本大震災、それに伴う福島原発事故、ギリシャのデフォルト懸念に端を発した外国為替の混乱、ジャスミン革命と国内外が騒がしい昨今、不安にさいなまれてビジネスにおいてもおちあちらへ行くべきか、こちらへ向かうべきか迷うところでしょうし、生活そのものも指向の変換を求められて、思い千々に乱れるところではあります。まさしく、今年のテーマである『元点回起』の通り、それぞれが原点に帰り、

自分の本当の力は何だろう、自分にできることは何なのか、日本の良さは何なのか、日本人の良さは何なのか、西高校生の良さは何なのか、と改めて振り返り、そこから、再び、自信をもって立ち向かっていくことが必要かと思えます。今年には辰年、竜は知識欲旺盛で、冒険や夢を追いかけるロマンチストであるといわれます。まさに、『元点回起』そのものです。今年の集いで、同窓生の皆様が存分に旧交を温めると同時に、西山台で学んだ誇りをもって夢を語り、辰年にふさわしく堂々と飛龍されますことを期待いたしております。

「新春の集い」を開催するにあたって、一年もの長きにわたって、一生懸命準備をしてくださった高44回卒の皆様と、ご指導及びご協力くださった評議員をはじめ多くの皆様に心から感謝申し上げますとともに、会員皆様のご活躍とご健勝をお祈りいたします。

# CHAIRPERSON OF THE SUPPORTERS' ASSOCIATION



静岡県立浜松西高等学校

後援会会長 **伊藤 孝**

新年明けましておめでとございます。

「新春の集い」が本年も盛大に開催され、同窓生の皆様が一堂に会し、交流と絆を深められることを心からお慶び申し上げます。

昨年は、東日本大震災による甚大な被害や世界的な経済情勢の混乱などにより、同窓生の皆様におかれましても少なからず影響を受けられたことと思います。こうした状況下では、人との繋がりがいかに大切かを改めて認識させられます。この「新春の集い」での繋がりが、同窓生の皆様のさらなる前進への一助となることを期待して止みません。

また、本年も「新春の集い」が無事開催できましたことは、ひとえに同窓生や関係者の皆様の温かいご協力の賜物でございます。

ここで改めて皆様に感謝申し上げますとともに、今後も引き続きご指導、ご支援をくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後に、この西山台の良き伝統が末永く引き継がれていくことを心から祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。



# PRINCIPAL



静岡県立浜松西高等学校

校長 植松 豊

新年明けましておめでとございます。

地元浜松市をはじめ全国各地で活躍されている同窓生の皆様が相集い交流を深められます。「新春の集い」が、今年もこのように盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

同窓生の皆様には、日頃より本校の教育活動に対しまして深いご理解と多大なご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、昨年は3月に東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故が発生し、東北・関東地方に甚大な被害をもたらしました。震災から10か月を経た今も多くの人々が困難な状況に置かれています。また、この未曾有の災害に加え、異常とも言える円高や国際的な金融不安が続いており、これからの日本の経済や国民生活に不安の影を落としています。

この国難とも言える状況を乗り越えていくためには、「がんばろう日本」のスローガンのもと、国民が一致団結して諸課題に取り組ん

でいくことが大切ではないでしょうか。また、

教育に携わる者として、地球全体の持続的発展や平和で自由・平等な社会・経済システムの構築に資する知性(知)、共生の理念を現実の生活の中で実現させていくために必要な思いやりの心(仁)、どんなに困難な状況にあってもたくましく生き抜く強い意志と肉體(勇)の三徳を高める教育を、これまで以上に意識して推進していくことが必要だと感じています。

本校の生徒たちには、教科の学習、特別活動、部活動に全力で取り組むことを通して、知・仁・勇の徳を高め社会に貢献しようという志を育んでほしいと思います。

本年が、東日本大震災からの復旧・復興、日本再生に向けた確かな一年となることを願うとともに、浜松西高等学校同窓会のみますの発展を心よりお祈り申し上げ、年頭のご挨拶といたします。



# REUNION'S HEAD COORDINATOR



2012年新春の集い代表幹事

高44回卒 **大村 明広**

新年明けましておめでとうございます。

高22回卒の皆様、還暦おめでとうございます。

本年も浜松西高校同窓会「新春の集い」が、多くの皆様のご理解とご協力により開催できることに對して深く感謝し、高44回卒一同を代表して心より厚く御礼申し上げます。

2011年は日本や世界各地において、震災や洪水といった天災による甚大な被害、政治経済の情勢不安による混乱が相次ぎ、多くの方が閉塞感、将来への不安を抱いたことと察します。同時に、被災地で懸命に生活する方々の様子、なでしこジャパンのW杯での活躍から、局面を打開するためには前向きな姿勢、団結力、絆の強さが大切であることを学んだ年でもありました。

今回は未来への活力、西高同窓生の連帯感を高めたく『元点回起 元気なココロを共有し、さらなるパワーアップを！』をテーマに掲げ、新春の集いを開催いたします。恒例の大抽選会のみにとどまらない全員参加の催し、西高生ゆかりのオリジナル記念品の販売など、自分達の身の丈にあった企画を採用

しました。旧友との再会や世代を超えた交流による新たな出会いを通じて、西高同窓会の素晴らしさを改めて実感できる集いとなるよう全力を尽くす所存です。

『元点回起』という造語ですが、「原点回帰」から「元点回帰」、さらには「元点回起」へと派生して生まれました。同窓会を「原点回帰（自分が原点であると思った場所に帰ること、初心に戻ること）」の場、38歳という年齢で幹事という大役を務めさせていただく同窓会、新春の集いを「元点回帰（何事においても、初めに習う時の気持ちや基礎的なところに立ち戻ること、真の実力を養成することにつながる）」の場と位置付け、我々は今日まで準備に努めてまいりました。その貴重な経験は、高44回卒の一人ひとりが今後歩むべき道において、大きな糧になると確信しております。これも偏に諸先輩方や関係各位のご指導、ご協力があつてこそその活動だったと実感しております。

最後に、母校浜松西高の永久なる発展、同窓生の皆様の益々のご多幸をお祈りし、ご挨拶とさせていただきます。

Masao Masuda

Yoshiko Hill

Rie Yamaguchi

Kaoru Hata

Shigemi Aoba

Juaji Shimizu

Jobu Souda

Taijo Souda

Yumi Kawamura

Rintaro Takada



# Energy Supplement







# Ene Develo

**元気な西風！今日も何処かで。**

自分の信じる道を歩き、輝きを放ちながら周りにもパワーをくれる「元気人」。  
そんなエネルギッシュな皆さんの今を追った。

〔中2回卒〕

# 増田 正雄

Masao Masuda

〔Profile / 1912年(明治45)生まれ(旧姓:榊原)。今回の取材では最高齢のOB。父娘2代で西高OB-OG。〕

開校から80余年、旧制中学から新制高校として県内初の公立中高一貫校へと発展を続ける浜西。旧制中学2期生の増田さん(静岡市在住)は、創立当時の様子を知る数少ない卒業生だ。今年2月に100回目の誕生日を迎える。

「当時の西山台は、山を切り崩しただけの荒地で、午後は運動場を造るために土を運んだり、整地をしたり。東坂の桜の木も、同級生と植えたんだよ」

文字通り、自分たちの手で西高の礎を築いただけに、母校への思いは深い。

当時、旧制中学への進学率は1割未満。

「入学試験に合格した時はそれは嬉しかったよ」

80年以上前の記憶も、鮮明だ。

小中学校の職員になった増田さんは、退職後、持ち前の探究心で、さまざまな趣味に挑戦。現在は週に2〜3度、テニスコートへ足を運ぶ。70歳の頃、体を壊し、リハビリを兼ねて始めたテニスは、すっかり日課だ。

「テニスをやらない日は、体調が悪くなる」そう話す増田さんは、まさに元氣そのもの。



所属する「静岡テニス倶楽部」は歴史のある名門クラブ。20代から最高齢の増田さんまで、幅広い年代の人たちが、それぞれのレベルでテニスを楽しんでいる。

この日も静岡市北部にある梅ヶ島のテニスコートで、しっかりと3試合、気持ち良く汗を流していた。さすがに、パワースマッシュとはいかないが、相手選手のない場所を狙い、ボレーを決める。

「かつて101歳のプレイヤーが所属していたから、とりあえずはそこかな」

まだまだ目標は尽きないようだ。

大先輩から後輩達へメッセージをとのリクエストに

「とにかく何でも楽しむのが一番。考え過ぎず、その時々自分なりにできることをやっていくということかな。今でも、同窓会報で後輩の活躍を見ると嬉しいね」

そう答える増田さんの座右の銘は

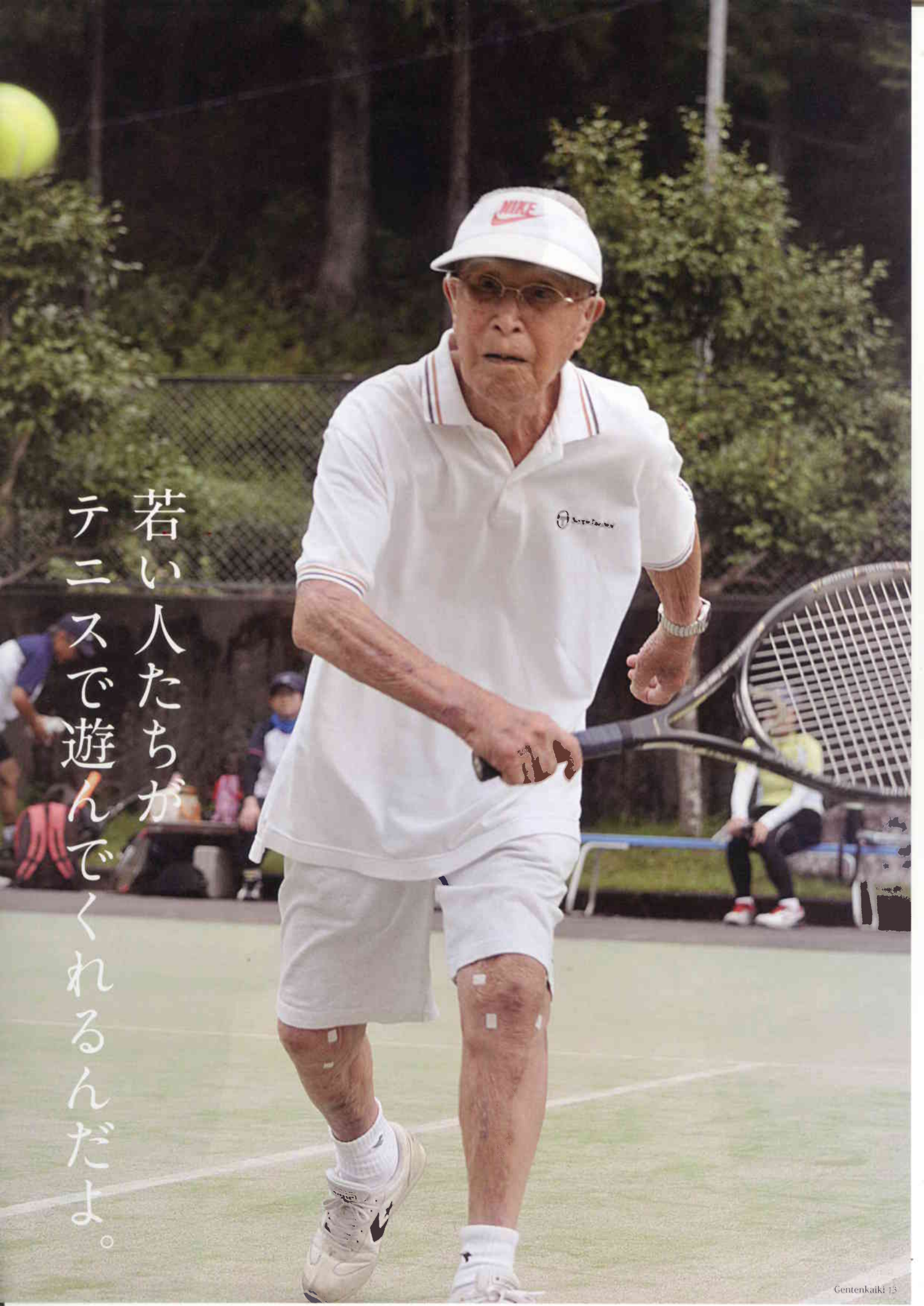
「身心悦楽」  
しんしんえつらく

何事にも臆せず挑戦を続ける増田さんの楽しい人生は、まだまだ続きそうだ。



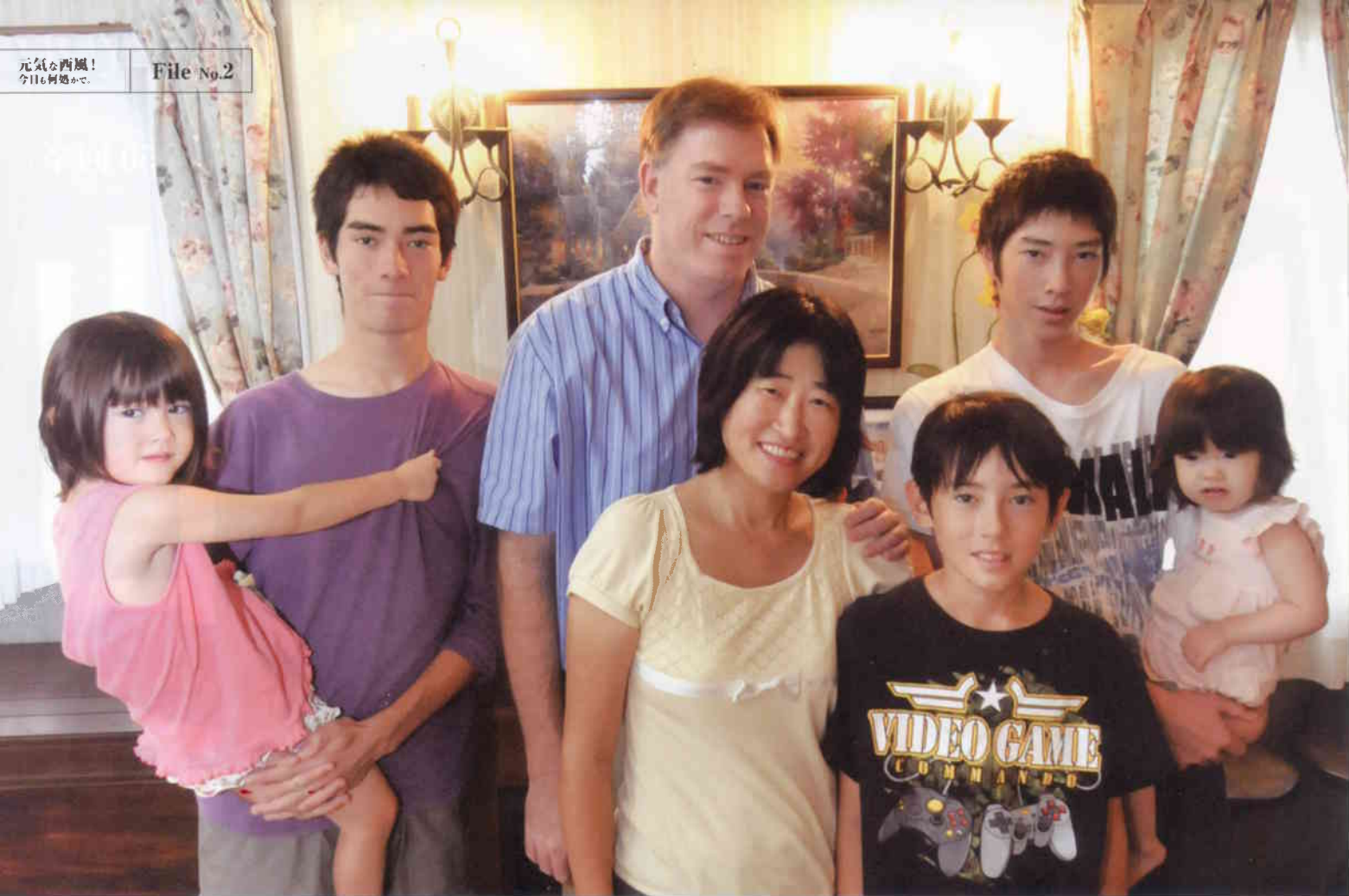
99歳、  
まだまだやるよ。





若い人たちが  
テニスで遊んでくれるんだよ。





〔高37回卒〕

# ヒル美子

Yoshiko Hill

〔 Profile / 1966年(昭和41)生まれ(旧姓・池谷)。1988年 大学在学中にアメリカLAへ留学。掛川市にて育児に奮闘中。 〕

子どもが3人以上いると思いやりのある子に育つんです。

アメリカ映画に出てくるような3階建ての可愛らしい家に、西高卒業生の美子さん、ご主人のロイさん、そして三男二女の子どもたち、総勢7人のヒルさん一家が住んでいる。

「私たちの周りは、子だくさんな家族ばかり。普通よ!」

5人ものお子さんを育てるのは、楽しいことばかりではないが、終始、苦労などは全く感じさせない明るい笑顔と、家族愛にあふれた場面や言葉に出会った。

「毎日の炊事・洗濯・子育ては、もう大変。でも子どもたちが手伝ってくれるから、本当に毎日賑やかで楽しいの。それにね、子どもがいっぱいいると、子どもたち同士で助け合い、思いやつていくようになるし、子どもたちの中でひとつのコミュニティーができていくから、他人にも優しい子に育つよ!」

その言葉通り、お兄ちゃんたちはずっと妹たちの面倒を見ていて、妹たちもお兄ちゃんたちが大好きな様子。さながら、騎士と姫という感じだ。

「私の元気の源は、子どもたち。いつもエネルギーシユで私を元気でいさせてくれるから。もっと深く言えば『自己犠牲の愛』かしらね。他者のために生きる愛情ってことなんだけど、真髄を日本語に訳するのはなかなか難しいかも。でも、私たち家族には、いつもこれが心にあると思う!」

7人の家族で暮らすヒルさん一家には、家族という小さなコミュニティーだろうが、国家・地球という大きなコミュニティーだろうが、同じなのだろう。そんな「家族」に対する、広く深い考え方に元気の源を感じた。

[高50回卒]

# 山口 利恵

Rie Yamaguchi

## Profile

1980年 (昭和55)生まれ(旧姓:神田)  
2002年 東京造形大学デザイン科卒業  
2005年 陶芸工房「利白窯」開業

元気の源である母のような女性になりたい。

西高の坂道を下ってすぐのところ、住宅街の中に佇む窯元「利白窯」で創作活動を行っている山口さん。エネルギー溢る女性。それが第一印象であり、その印象は最後まで変わらなかった。

「小学生の頃から伝統工芸に興味がありました。が、中学生の時には調理師になりました。でも高校3年生の時に、興味が料理から美術に変わりました」

高校卒業後美術系の大学に進学し、4年生の時に転機が訪れた。父の同級生で母校の恩師でもある美術の粟野先生の紹介で、著名な陶芸家・寺田康雄氏に師事。3年の修業の後、「作家として生きていけ」と、師から最大の賛辞をもらい独立。

「もちろんともうれしかった。けれど、私は人と接するのが好きだったから、人とのつながりを大切にしたい創作活動をしたかったんです」

自分の歩く道を定めると、山口さんは動いた。家族に「陶芸教室を開きたい」と話すと、「やってみれば？」という答え。中でも「好きなことを一生かけて、好きにやってみなさい」と言ってくれた母の言葉は、今でも大切な宝物だ。

2005年「利白窯」を開窯。名前は祖父がつけてくれた。現在はご主人、息子さんとの幸せな家族に生まれ、陶芸教室を開きながら創作活動を続けている。

そんな山口さんの「元気の源」は、お母さま。

「私にとって母は、一番の協力者で理解者。母はいつも明るくみんなから愛される女性で、今は越えられない存在。でも、現在の活動を通して、私もいつかみんなから愛される陶芸家になれたらいいな」



[高40回卒]

# 畑

Kaoru Hata

# 薫



### Profile

1969年 昭和44)生まれ(旧姓:増田)  
1996年 聴覚障害を持つ長女の出産を  
機に手話の勉強始める  
子育て支援サークル  
「親子でサイン・グループ・キバー」  
設立

## 今の私があるのは娘のおかげかも。

一瞬で人を惹き付ける、太陽のような笑顔が印象的な畑さん。

「部活見学のとき剣道部の先輩がアメをくれたんですよ。それがきっかけで剣道部に入部。アメにつられるなんて、単純すぎるでしょ(笑)」

そう西高の思い出を話す笑顔の中には、何の曇りもない。しかしそんな畑さんも、お嬢さんの耳が聞こえないことが分かったときは、さすがにショックを受けたそう。けれど、今では家族みんなでもとても幸せだと笑う。そこにはある子育て法があった。

それは、日本の手話をもとにしたサインを使う方法。言葉よりも早く親子のコミュニケーションを取ることが可能で健常者の子に対しても有効だ。

「サインがあれば、子どもには言いたいことを伝える力、親にはそれをキャッチする力がつき、自然と親子の絆が生まれたんです」

これをきっかけに畑さんは、サインを使ってコミュニケーションをとる子育て法を教えている。

「私は、娘には『聞こえない自分をそのまま受け入れてほしい』と思って育ててきました。中学生になった娘は、今では『聞こえない自分が好き』とすら言っているほどです。そんな経験から一人でも多くの子が娘と同じように自分を好きになってくれる環境を作っていきたいと、強く思うようになりました」

この明るさと強さはどこから来るのか?の問いに、畑さんは最高の笑顔を浮かべ、答えた。

「子どもの笑顔、かな?」

# 野球が原動力。

[高 12 回卒]

# 青葉 滋美

Shigemi Aoba

## Profile

1941年 (昭和16) 生まれ  
1977年 西高野球部監督に  
就任  
1981年 監督として全国高校  
野球選手権大会  
(甲子園) 出場

24年ぶりにシード校に選ばれ、甲子園の期待が高まった2011年夏。上位進出はならなかったが、古豪復活を鮮やかに印象つけた。西高旋風は再び巻き起こるのか。我が校で唯一甲子園の土を踏んだ監督と主将は、当時の経験を今に伝える。

青葉さんは昭和52年、35歳で勤めていた銀行を辞め、監督業に専念した。

「監督をやる人がいなかったからね」と謙遜するが、母校のために銀行員のキャリアを捨てるという決断は、それだけで選手の奮起を呼び起こした。

現監督の清水さんが西高野球部の門を叩くのは、青葉さんが監督に就任して2年目のこと。

「勝負への執念はすごかったですよ」清水さんが『青葉野球』を振り返って言う。「相手の力が6でうちが4でもひっくり返す野球を目指してました。社会人の経験がある分、先生というよりも勝負師という感じでしたね」

戦力は着実に上がり、清水さんが高2の夏には決勝まで進む。しかし、あと一步で優勝を逃してしまふ。落胆を引きずったままの翌日、青葉さんが新チームの部員に語った言葉を、2人は今も鮮明に覚えている。

「お前ら、本当に甲子園に行きたいのか？」炎天下のグラウンドで部員たちはいきなりこう尋ねられた。戸惑いながらも大声で「はい」と応じると、青葉さんは唖叫を切るような口調でこう言い放った。

「よし、それなら俺は今度こそ、甲子園に連れて行くぞな」

そこまで断言した理由を、青葉さんは今、照れながら明かす。「正直言えば、この年の決勝で負けた



[高 34 回卒]

今も昔も西高

# 清水 淳次

Junji Shimizu

## Profile

1963年 (昭和38) 生まれ  
1981年 主将として全国高校  
野球選手権大会  
(甲子園) 出場  
2001年 西高野球部監督に  
就任



チームのほうが実力は上。簡単ではないことは十分わかっていた。でも、このままで終わられるか、という思いだけは選手に伝えたかったんだよ」

青葉さんの「宣言」通り、チームは1年後、甲子園の切符を見事に手にする。校歌は甲子園でも流れ、浜松のまち全体がその勝利を祝福した。

あの熱狂から幾星霜。

監督を引退した青葉さんは、民間会社に就職。30年経った今でも西高の試合には必ず足を運ぶ。

「なかなか1人では行けないけど、野球部OBが試合に連れて行ってくれる。本当にありがたい。でも、今も監督の目で観戦するから、試合中は拍手もおしゃべりも一切しない。友人からは「一緒にいてもつまらない」と言われるよ」と笑いながら言う。

一方、現役監督として指揮をとる清水さん。近年の躍進に周囲の期待は高まるばかりだが、「特に気負いはありません。声援が大きいことこそが大きな励みです」と自然体を貫く。

長い歴史の中で、甲子園に出場できたのはあの1度だけ。しかし、憧れの舞台に立つことのないまま、練習に明け暮れて引退していった多くの卒業生たちの思いは、西高野球の伝統となって現役世代を支える。

「西高で監督を務め、野球を通じて後輩でもある子どもたちの成長する過程に携われることほど、幸せなものはないですよ」と清水さんが話す。青葉さんも頷いて言う。「俺も最近、ますます西高野球のことが頭から離れねえんだ」

師弟の活力はやはり西高野球のようだ。

[中 19 回卒]

左右田

[高 37 回卒]

Taijo Souda

Jobu Souda

泰丈夫

## Profile

丈夫(父)  
1928年 (昭和4)生まれ  
1953年 第10代瑞生寺住職  
兼任  
泰丈(子)  
1966年 (昭和41)生まれ  
1993年 瑞生寺副住職兼任

## 絆の大切さを伝えることが使命。

西高南のバス停前に位置する曹洞宗「瑞生寺」。ここに親子三代西高という左右田さん一家がいる。住職の丈夫さんと、副住職で教育にも携わる息子の泰丈さん、泰丈さんのお嬢さんと息子さん(西高・西高中等部に在籍中)だ。

「放課後、吹奏楽部の奏でる音が聞こえてくると、懐かしい気持ちになります。私も吹奏楽部で運動部並に練習していましたから、同期の絆も運動部並。今でも毎年末、同期中心に集まっています」

楽しそうに話す泰丈さん。丈夫さんにも当時のことを尋ねると、ゆつくり口を開いた。

「私たちの時代は戦争中で勉強もままならない環境。空襲で亡くなった同級生もいます。けれど皆、学ぶことを忘れず、後に教員となった同級生が多かった。私も中学校で教鞭を執りました」

激動の時代を乗り越えてきた丈夫さん。現在は住職として地域活動に携わる一方、救護施設「慈照園」の園長として社会福祉の一環を担っている。その長年の活動が認められ、平成13年に勲五等を授与された。

「今の時代は心の病で苦しんでいる方がとても多い。そういった方の社会参加・復帰をこれからも助けていきたい。その中で、住職として亡き人とのつながりの大切さを伝えながら、人として、今この世に生きている地域や同級生とのつながりも含めた絆の大切さを伝えていくことが、私の使命だと思っています」

そんな左右田さん親子の『元気の源』は、人との出会い。一期一会。

「今しかない、今という時の出会いに感謝し、後悔しないものにしたいです」



[高44回卒]

# 河村 由美

Yumi Kawamura

Profile

1973年 昭和48年生  
1996年 FM新潟(新潟放送)で  
パーソナリティを務める  
1997年 K-MIXパーソナリティ  
[K-MIXキャラメルポケット] 司  
[シネマスクエア] 司理

## ラジオは人と人を結ぶ仕事なんですよ。

顔は知らなくても、彼女の声を聴いたことがある人は多いはずだ。

ラジオ局K-MIXの「キャラメルポケット」や「シネマスクエア」のメインパーソナリティとして幅広い世代から支持を集める。いずれも10年近く続く人気番組。自身の体験談を交えつつ、映画や音楽の楽しさを紹介する。

確かなアナウンス技術に裏打ちされた、凛とした話し方は彼女の持ち味。時折見せるさりげない心遣いとともに、番組をぬくもりのあるものになっている。

「20代の頃と違って『前へ、前へ』ではなくまりました(笑)。自分に合ったやり方は何か。試行錯誤でたどり着いたのが今のしゃべり方なんです」

西高を卒業後、東京の大学へ。新潟のコミュニティFMに3年勤務した後、地元で働くことを決めた。「しゃべり手」になることは幼い頃からの夢だった。

今はラジオだけでなく、イベントの司会、映画のレビュー執筆など多忙をきわめる。

そんな彼女の「元気の源」はリスナーからのメッセージ。ある番組で寄せられたリスナーの優しさは今も忘れられないという。「震災で心が不安定だった時、あるメッセージをきっかけに番組中に号泣してしまったことがあったんです。でも大勢のリスナーがメールで励ましてくれて……」

ラジオは人と人を結ぶ仕事。そんな言葉を改めてかみしめる貴重な経験だったという。

ラジオが持つリアルタイムのつながり。そうしたメディアで自分は何を伝えられるのか。インターネット全盛とされる昨今、ラジオの可能性を彼女は考え続けている。



〔中等部3年〕

# 高田 麟太郎

Rintaro Takada

〔 Profile / 1996年(平成8)生まれ。2009年 浜西くりーんの会 設立。2010年 SmilinGreen静岡の前身「浜西くりーんの会」設立 〕



「もったいないことはしたくない」

西高中等部へ進学後、授業でシャープペンシルの使用が解禁になった。急に使うことができなくなった鉛筆の扱いに困ってしまった。捨てるしかないのか。それとも何か役立てる方法はないのか。そんな疑問を抱いたのが、スマイリンググリーン静岡設立のきっかけだった。

もともと海外の貧困問題に関心があり、鉛筆などいなくなつた文房具を仲間から回収。発展途上国の子どもたちに送ることを思いついた。

そのための準備を友人と進めていたところ、2011年3月11日、東日本大震災が発生。国外への支援も大切だが、まずは身近な人に手をさしのべようと送り先を宮城県に変更した。最終的に現地に送つたのは、段ボール約120箱分にも及ぶ。

「感謝の手紙がたくさん届いて、嬉しかったです。やつて良かったと本当に思いました」と微笑む。

スマイリンググリーン静岡について彼はこう話す。

「メンバーのバランスがよくとれているんです」

本人いわく、自身は「猪突猛進型」で、みんなを引っ張るタイプ。そういう高田君を巧みにコントロールし、方向性を示すのが副代表の松山君。いつも会議で奇抜なアイデアを連発するのが総務の溝口君。

「みんながいるから楽しく活動できている」と高田君は強調する。

スマイリンググリーン静岡の活動は文房具を送る

## 「もったいない」からすべては始まった。



だけにとどまらない。

昨年の夏休みには被災者親子を浜松に招待する『心の耕しツア—in浜松』を企画。被災地3県から約40人の親子が参加した。

現地でのイベントに付き添ったほか、40人の生活を1週間にわたりサポートした。

この企画には高田君たちよりもはるかに年上の大人も参加したが、彼の強みは子ども目線に近いこと。招待した子どもたちからは歳の近いお兄さんとして大人気だったという。

今後の目標は、スマイリンググリーン静岡の活動拠点を作ること。2012年1月頃までには文房具回収が常時できる場所を作りたいと考えている。

現在は中等部で吹奏楽部に所属し、部活とボランティア活動で忙しい毎日。スマイリンググリーン静岡の代表として新聞などの複数のメディアから取材を受け、大人顔負けの対応を示すが、「甘い物を食べると元気が出ます」と中学生らしい一面もみせる。

これまでの活動では法律や制度の壁に阻まれることもしばしば。こうした経験から法律の専門家になる夢を思い描く。

スマイリンググリーン静岡の会規約には、設立目的を「きれいな地球ときれいな心を作ること」と明記。彼らの素直な活動をみてみると、その文言が決して大げさなものではないと感じられるから不思議だ。





# 登つてこの坂を

## School Building

桜の咲く春も、冷たい風の吹く冬も、  
いつの時代も変わらず西高生が登るこの坂道。  
坂の上に広がる風景はどう変化していったのだろう。  
時代とともに変革する校舎の歴史を追った。





# The First

## 初代

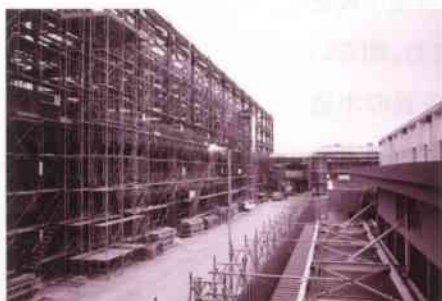
【1925～1954】

大正13年4月に浜松第二中(浜松西高の前身)が開校。

用地選びが難航し、開校からの10か月間は浜松師範学校を  
間借りした。本校舎が完成したのは大正14年2月。明るい  
コバルトブルーの壁面に屋根瓦の載った和洋折衷の木造  
校舎。見晴らしの良い西山台で空に映え、市民の評判を呼んだ。



# Second



## 二代目

【1955～1990】

昭和29年7月5日、初代校舎は原因不明の火災により焼失。木造だったため被害が拡大したとして、鉄筋コンクリート造で校舎再建を計画。昭和30年11月に3階建校舎が落成し、高度成長期と共に歩み出した。色の違うタイルが並んだ配管むき出しの廊下がノスタルジーを感じさせた。





# Third



## 三代目

【1991～】

平成2年、老朽化が進んだ2代目校舎の建て替えが決定。プレハブ仮設校舎を経て、平成3年12月、新校舎が完成した。校歌に歌われるような瓦葺き風の屋根や開放的なベランダなど、随所にアイデアが生きる現校舎は、今もなお、高台の「聳ゆる麓」であり、ふるさとを新幹線で通りすぎる多忙な同窓生を見守っている。

返っていただきました。



31HR

担任：中津川安清 先生

小林 佐登志

(史学クラブ)



old days



now

私が3年生で在籍した31HRは、国立文科系志望の男女混合クラスでした。結構個性的な仲間が集まっていた、受験勉強もそっちのけで好きなことをやっている仲間が多く、私を含め多くの仲間が浪人生活を送った、そんな時代でした。

その西高も、いまでは6年一貫教育となり東大など国立の難関大学へ多数入学するようになったことを知って、時代の移り変わりを思わざるをえません。

私の時代の西高生は、

いわゆるガリ勉タイプは少なく、みんながそれぞれ自分の個性に感じ、高校生活を十分楽しんでいました。私はそんな西高生であることが好きでした。

思えば、遅刻寸前の登校時、西山台への坂道を息を切らして駆け上ったあの時の息遣いを今でも懐かしく覚えています。その仲間もみんな選暦を迎えます。

第二の人生は、あくせくすることなく一歩一歩噛み締めてゆつくり歩みたい。そんなことを考える今日この頃です。

# 祝 還 暦

## Congratulation!

高22回卒の皆様  
還暦おめでとうございます。

この度はご還暦を迎えられ誠におめでとうございます。  
これからの益々のご活躍とご健勝を  
浜松西高同窓会一同、心よりお祈り申し上げます。



# 各クラスの皆さんに、西高当時の思い出を振り

## 33HR

担任：大塚正彦 先生

### 進藤 元子

(旧姓：石川)

私は転校生で2年から西高生です。学年は450名、うち60名女子という状況で、女子高から来た私は東坂を上る生徒のほとんどが(ほぼ全員!)男子という様子に、初日はびっくりした記憶があります。とても楽しい2年間でした。

途中担任の大塚先生が北坂を下って追いかけて来られたけれど、私たちは走って走って澤の金魚屋までお弁当を食べ昼休みに教室へもどりました。5時間目は大塚先生の授業で、私達は立たされしっかりと叱りを受けました。いつもワイワイと楽しかった思い出があり、40年たったクラス会でも変わらずワイワイ賑やかな感じですね。

## 32HR

担任：新村博保 先生

### 永由 康紀

(地理クラブ)



old days



now

原稿を書き出すと過ぎ去りし歳月が次々と思ひ出される。卒業後42年間の人生で何だったんだろう、いや、難だったんだろうと置き換えた方がいいのかも。懐かしい思い出もたくさんあるけど、これからだってまだまだ長い。のんびりもいいが、時間を大切に頑張って仕事をする。ことでいつまでも若々しい人生を送りたい。

いつも皆で気ままにワイワイやっていた。残念なことにはクラスの3人の友人が他界してしまった。友よ、一人も欠けることなく次の再会を楽しみに元気に顔合わせをしようじゃないか。これまでの42年間、西高32HRという唯一のつながりでお付き合いをさせていただいたことに感謝をする。友よ、本当にありがとう。これからもよろしくお願ひします。

## 35HR

担任：鶴田悟 先生

### 鈴木 喜晴

(応援団・野球部)



old days



now

応援団と野球部のことを懐かしく思う。おかしな組合せだが、応援団はクラス役員として在学中務めた。校内での応援練習、炎天下の野球場では学ラン高下駄での応援、応援生徒への叱咤(しつ)を囁(ささや)かしたなあ。

も苦く楽しくもあった思い出である。卒業後も、同級仲間や22年前の「新春の集い」幹事の連中などと飲み会やゴルフが続いている。「ハイザー西高」「ハイザー西高フレイオー」

## 34HR

担任：蛭田建二郎 先生

### 石橋 誠

(庭球部中退)



old days



now

西高校時代は、新しい天体だった。元城小、中部中学と、同級生はほとんど商店の子供達、限られた井の中で育って来ました。入学した1年生ですぐに仲良しになった、浜北の村松正弘君が、早朝登校する途中、我が家に寄って「これ、今朝しぼった牛乳」と、2リットル位の牛乳瓶を持って来てくれました。これには腰が抜けました。クラスは、自己紹介では鈴木木君は、「メキシコオリンピックを

目指して頑張ってます」と言いました。なにを思いましたが、彼は走り幅跳び中学新記録ホルダーと聞いて、これまたびっくりしました。カフカだマルクスだと、理解出来ない奴に、熱く語ってくれた稲田謙一君。君は今、浜松市生委員児童委員協議会会長で頑張ってますね。変わらず熱いね。3年間の仲間との思い出には、際限がありません。色々な人との出会い、新しい天体が始まりました。

# 37HR

担任：松原峻 先生

## 鈴木 久隆

(英語部)



old days



now

高校を卒業して早42年が過ぎ、還暦を迎える年齢になったのかと思うと、何か信じられない気がします。私たちのクラスは、男子34名、女子16名の理系のクラスでした。今、振り返ってみますと、女子が勉強や学校行事などに大変頑張っていて、クラスをリードしていた感じがします。しかし、特にクラス内での競争意識もなく、クラス皆が楽しく、高校生活を謳歌していました。担任の松原先生の授業中での何か内に秘めた笑

祭では、演奏中に幕が突然下りてしまうハプニングに拍手喝采(?)、3年生になり自信満々で臨んだ大学受験は次々と落ちる想定外(?)の結果に、ひやひやしながらもなんとか滑り込み。

西高を卒業して42年、還暦を迎えた今でも、恋あり、涙あり、笑いありの西高時代の思い出は私の大切な宝物です。

みが大変印象的でした。先生をお迎えして、還暦を祝いたかったですが、お若くしておじくなりに、大変さびしくて残念で仕方ありません。「高校時代の友達は一生の友達」これからも、親交をさらに深め、健康に留意し、第二の人生、お互い頑張っていきましょう。

# 36HR

担任：懸川高治 先生

## 前嶋 文明

(生物クラブ)



old days



now

1年生の1学期が始まって間もないころ、1時間目が終わるとすぐに弁当を食べ始める朝練帰りの野球部の同級生にびっくり！お弁当はお昼休みに食べるものだと思っていた真面目な(?)私にとつて「なんだ、この学校は？」と、いきなりのカルチャーショック。そんな私も2年生になると、朝練もないのに3時間目が終わるとチョット早めのランチタイムの毎日でした。

1年生の富士登山では、山室で「早く寝ろ」と先生に頭を叩かれ、2年生の音楽

# 39HR

担任：江夏金俊 先生

## 堂森 万平

(写真部)



old days



now

11、23、39HRと3年間を過ごしました。11HRから23HRには20名近くが、23HRから39HRには40数名が持ち上がり、3年間同じ仲間が15名、2年間同じ仲間は40数名になります。部活は写真部、初めてのカラー写真のプリントに苦勞しました。オートバイの免許も取れました。大学に入学してバイクの免許を持つていた同級生はたった2人だけでした。映画が大好きで月に2回は映画館に通っていました。大学受験のプレッシャーの中、

在学中はバラ色の青春を過ごしていたとはとても思えていませんでしたが、今振り返ればそれなりの時を送っていたのかも。数年後浜松に戻り、西高同窓生たち20数名とひと月おきに飲み会を開いていますが、39HRの仲間が一番沢山います。

# 38HR

担任：白谷光彦 先生

## 清水 俊彦

(放送部)



old days



now

担任の白谷先生は、温厚・沈着。皆怒られた記憶もなく、先生というより『学者』の風情が感じられました。先生は優秀なただけで生徒はそうはいかない。窓から見える国鉄(現JR)の操車場の新型車両を見つめては、温かい日射しの中でうつつらうつつら。さぞや苦勞された事と思う。

西山台の運動場の南は現在の様な商店や住宅街はなく、一面すすきの野原でした。その海原の先に「根上がり松」の岸がぼっかり

浮かんでおりました。2本のうち1本が近年根もとから折れたとの事、まことに残念です。

野原では、免許とりたての若い数学の先生が昼休みに必死の形相で運転の練習をしていたり、根上がり松の下で昼寝をする者がいたりでのんびりとした風景が流れておりました。私も眠ってしまった事があります。

空を見ながらあの頃、何を考えていましたかねえ。



Silver button Strap  
for Charity

# 象徴。

かつて身にまとっていた学ラン。  
金ボタンが主流の学生服の中で  
個性的に煌めくシルバーの輝き。  
西高生であることの誇りをくれた  
西高の象徴、銀ボタン。  
あの頃のままだに、思い出とともに、  
ストラップとして復活。

## 東日本大震災支援 チャリティ銀ボタンストラップ 会場にて発売中。

※当日限りの販売となります。ご了承ください。

ストラップの販売収益は、義援金として被災地に寄付いたしますのでご協力をお願いいたします。  
また、このたびの東日本大震災において被災された皆様へ心よりお見舞い申し上げますとともに、  
被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

限定 1,000 個  
NOW ON SALE!



500 円(税込)

